

女性大学生における性役割意識

関 根 聡

A Study about Female College Students in Gender Role Consciousness

Akira Sekine

抄 録

近年のジェンダーに関する研究は、「女らしさ」、「男らしさ」などの性役割意識を自明のものとし、それらが性役割規範となって性役割行為を導いている状況や、その行為の結果そのものについて論述される場合が多かった。そこで本稿では、性役割行為の規範や行動、および評価基準となっている性役割意識の変動について読み解く作業を行う。特に女性大学生の性役割意識にその焦点を合わせ、価値観の変容を考察していく。

キーワード：性役割意識、女性性（女らしさ）、男性性（男らしさ）、ジェンダー

(2005年9月30日 受理)

Abstract

Many of gender-related studies in recent years have made presupposition that gender role consciousness of "Femininity" and "Masculinity" are prima-facie, and discussed about the situation of acts of sex-role driven by the norms that are derived from the aforementioned presupposition, or outcomes of such acts. This article will examine changes in the norms for gender actions and in gender role consciousness that function as criteria for acts and evaluation, which has not been done. Especially, it will focus on the gender role consciousness of female college students, and examine changes in values they hold.

Key words : Gender role consciousness, Femininity, Masculinity

(Received September 30, 2005)

1. 本研究の目的

これまでの性役割に関する研究では、「男性性とは、特定の構造的心理学的欠陥に答える応答」(Gilmore 1990=1994:266)や「自己の犠牲」、「向上と権力の獲得」、「自立」、「強さと困難に立ち向かう覚悟」(Badinter 1992=1997:166)、「男性には知性と行動力、女性には美と従順」(安川 1989:214)といったように、「女らしさ」、「男らしさ」などの性役割意識は実在しているものとして、これらの性役割意識が行為規範(性役割規範)となって各々の性に沿った性役割を導いているとして扱ってきている。たしかに性役割意識と性役割行為は密接に関係しており、時には相互に補い合っているものの、ここで留意しなければならないことは、性役割分析を詳細に行っていくにあたって、あくまでその両者を分離させ、別のカテゴリーとして捉えることである。そこで本稿では、性役割規範や評価基準となっている性役割意識の変動について読み解く作業を中心に行っていく。特に性役割意識について焦点を絞ることは、性役割意識及び性役割行為のそれぞれの変化の関連性を説明する上で有効だからである。仮に現在における性役割規範でもある性役割意識について考察及び分析せずに、過去の女性性、男性性に関する研究から得られた見解の上に、今日の男女のジェンダーの関係性をあてはめていくことは、全く変化をしていない規範や役割といった部分のみ言及していくことは可能であるが、今日の男女の関係性を支える性役割意識や、性役割意識の変化については明確にはならないことが予測される。ゆえに両者を分離させ捉えることは、役割遂行も含めた上での、今後のジェンダーの関係性を予測していく手段として有効になってくる。

そこで、これまでのジェンダーに関する研究の中でも、社会規範の一側面としての性役割規範である、「女らしさ」、「男らしさ」といった性役割意識を分析している先行研究についての整理を行った。はじめにパーソナリティとしての特性の分析として、性役割意識や、価値観といった男性性や女性性について捉える試みのなかでも、L. M. ターマン(L. M. Terman)やC. C. ミルズ(C. C. Miles)の研究(Terman and Miles 1936)において分析された性度検査(Masculinity-Femininity Test)、男性性と女性性を対極に位置づけ測定するMMPI(Minnesota Multiphasic Personality Inventory)のMf尺度(The Masculinity-Femininity Scale)(日本MMPI研究会 1969:23-24)による測定、あらゆる事柄を男性性や女性性に結びつけ捉えカテゴリー化していく手法であるジェンダー・スキーマによる土肥伊都子の研究(土肥 1994;1995;1998)、加えて伊藤裕子によるM-H-F尺度(男性性[Masculinity]—人間性[Humanity]—女性性[Femininity] Scale)(伊藤 1978)、など個人の性役割の価値観に焦点を絞った研究を中心に、調査の方向性と分析方法の検討を行った(拙稿 2004:60-62)。

その上で本稿では、ジェンダー・スキーマによる実証的研究の業績を踏襲しながら、現在における性役割意識についての観察を行っていく。またこの方法を用いることにより先行研究の結果を含め、若い世代における性役割意識の変化の推移について、時系列に捉えることも可能になる。ただし、今回の調査は限られた一地域の大学生に対して行ったとい

うことから、標本の代表性が保証されないという欠点が存在している。しかしこれまでの方法を検討し一部踏襲することによって、性役割意識の時系列的な考察及び現状の価値観の把握と、これまでになされてきた研究とほぼ同じ範囲の人々を被験者として対象にしている調査であることから、34の形容詞群からなる尺度によって青年期の性役割認知に関して明らかにした1967年に行われた柏木恵子の調査（n=100）、及び1988年の土肥の調査（n=121）などといった、これまで少ない規模で行われていた調査との、比較検討が可能である。

若い世代に焦点を絞ったジェンダー研究は近年余りなされてはいない。確かに現在のジェンダー状況を考察及び把握するにあたって、若い世代のみに焦点を絞ることは一般化という考えのもとにおいては有効ではないが、性役割意識についての調査報告を含む、第7回世界青年意識調査報告書（内閣府政策統括官編 2004）や男女共同参画に関する世論調査（内閣府 2005）などの指標からも明らかなように、性役割意識が男性よりも緩やかである女性に対して焦点を絞っていることから、今後若年層のジェンダー関係の変化の方向性を探るうえでも有効であると考えられる。

2. 調査の概要

2.1 調査の期間及び対象

本調査は、2005年5月～7月に大阪府内の大学に所属している大学生（女性165名）を被調査者として、講義時間の一部を利用し集団調査法によって実施した。

2.2 調査項目の選定

本調査の項目作成にあたっては、男性性・女性性を2つの独立した次元として捉えるアンドロジニー・スケールを基本部分で用いながら、先行研究で行われている項目の選択、並びに先行研究との比較が可能な項目を追加し、関根薫（関根 2002；2003）及び筆者（拙稿 2003；2004）がまとめ作成した36項目からなるスケールを採用して行う。このスケールを使用することによって、性役割意識の現在の状況、加えて性役割意識の変化及び過去との比較が可能になる。項目の選定にあたっては、「性格」、「態度」、「行動」、「知性」という4つの分析軸を設定している。そしてこの分析軸にあてはまる項目については、アンドロジニー・スケールにもとづく測定としては国内における代表的な研究でもある、東清和のBSRI日本版項目（1990）、及び柏木（1974）、伊藤（1978）、土肥（1988）らの項目を中心に採用し選定を行っている。

本調査のように「女らしさ」、「男らしさ」を問う項目の場合、比較的類似した形容詞群が多いことから、キャリアオーバー効果が発生しないよう、乱数表をもちいて質問の配置を行い、なおかつ同じ項目の質問が接しているものなど、キャリアオーバー効果が生じる可能性のあるものについては、さらに関連し合う項目を分散させた。各質問については「かなり重要である」から「ほとんど重要でない」の5件法で回答を求める方法により行っている。

解析結果の処理については、過去の同調査との時系列比較、男性・女性役割得点のそれぞれの平均値からのt検定を中心に分析を行っている。t検定については男性、女性にとってそれぞれどのくらい望ましいと思うかを評定させ、選択肢の順にそれぞれ5点～1点を与え5点満点で得点化をし、男性・女性役割得点を算出し行っている。また先行研究との比較においては、柏木(1974)、伊藤(1978)、土肥(1988)、東(1990)が行った調査結果と比較可能な項目について行った。

3. 調査結果の分析

分析については本調査から得られた知見に加え、これまで社会学及び心理学の分野で行われてきた、性役割に関する先行研究の中でも本稿作成にあたって採用及び参考にした、調査結果との比較分析を行い、現在の性役割の位置づけを明確にしていく。特に採用した先行研究との比較分析を通して1970年代以降の性役割意識についての分析結果が、この間にどのように変化してきているのかを明らかにするとともに、その変化の要因についても考察を行う。以下の分析にあたって関根が行った「アンドロジニー・スケールによる比較分析」(関根 2002; 2003)及び筆者(拙稿 2003; 2004)のまとめた項目を踏襲し考察している。はじめに調査結果の性役割意識の分析状況にもとづいて、男性・女性役割得点それぞれの平均値を算出しt検定を行った(表1参照)。

表1では、各項目における男性役割得点の平均値から、女性役割得点の平均値を差し引いたものを平均値の差異得点として算出を行っている。その結果の正の値をとりかつ有意差が認められた設問項目を「男性性項目」とした。一方、差異得点が負の値をとりかつ有意差が認められた設問項目を「女性性項目」とした。そして差異得点の有無に関わりなく、平均値に有意差が認められなかった設問項目を「有意差無し項目」としてカテゴリー化し、最終的に差異得点の絶対値の降順で表に示している。加えて表では各項目の男性・女性役割得点の平均値とその有意性を記号を用いて付し、差異得点については不等号によりその大小関係を示している。

はじめに「男性性項目」として有意差が認められた設問項目を差異得点の絶対値の降順で確認すると、「たくましい」、「頼りがいのある」、「決断力のある」、「行動力のある」、「忍耐強い」、「大胆な」、「積極的な」、「誠実な」、「信念を持った」という順になり9項目が該当した。

次に「女性性項目」として有意に差が認められた設問項目を同様に、差異得点の絶対値の降順で確認すると、「言葉のていねいな」、「かわいい」、「繊細な」、「色気のある」、「優雅な」、「分析的な」、「愛嬌のある」、「おしゃれな」、「静かな」、「子ども好き」、「視野の広い」という順となり11項目が該当するという結果となった。

そしてt検定によって有意差が認められなかった「有意差無し項目」を差異得点の絶対値の降順で確認すると、「献身的な」、「冒険心に富んだ」、「指導力のある」、「政治に関心のある」、「自分の生き方のある」、「自己主張のできる」、「従順な」、「学歴のある」、「暖かい」、「明るい」、「率直な」、「健康な」、「心の広い」、「意志の強い」、「優しい」、「頭のよ

表1 男性・女性役割得点、及び差異得点の平均値とt検定結果

	項目	男性役割得点 (平均値)		女性役割得点 (平均値)	差異得点 (平均値)
男性性項目	1 たくましい	4.16	>***	3.29	0.87
	2 頼りがいのある	4.56	>***	3.77	0.79
	3 決断力のある	4.50	>***	4.09	0.41
	4 行動力のある	4.45	>***	4.14	0.31
	5 忍耐強い	4.40	>***	4.16	0.24
	6 大胆な	3.40	>***	3.20	0.20
	7 積極的な	4.13	>*	3.98	0.15
	8 誠実な	4.43	>*	4.29	0.14
	9 信念を持った	4.34	>*	4.21	0.13
女性性項目	10 言葉のていねいな	3.58	<***	4.39	-0.81
	11 かわいい	3.20	<***	3.99	-0.79
	12 繊細な	3.06	<***	3.83	-0.77
	13 色気のある	2.91	<***	3.60	-0.69
	14 優雅な	3.18	<***	3.63	-0.45
	15 分析的な	2.59	<***	2.96	-0.37
	16 愛嬌のある	4.02	<***	4.38	-0.36
	17 おしゃれな	3.65	<***	3.97	-0.32
	18 静かな	2.62	<***	2.90	-0.28
	19 子ども好き	4.15	<***	4.33	-0.18
20 視野の広い	4.31	<*	4.48	-0.17	
有意差無し項目	21 献身的な	3.62	<	3.73	-0.11
	22 冒険心に富んだ	3.68	>	3.58	0.10
	23 指導力のある	3.55	>	3.45	0.10
	24 政治に関心のある	3.20	<	3.30	-0.10
	25 自分の生き方のある	4.43	<	4.51	-0.08
	26 自己主張のできる	4.13	<	4.21	-0.08
	27 従順な	3.30	<	3.38	-0.08
	28 学歴のある	3.06	>	2.98	0.08
	29 暖かい	4.45	<	4.52	-0.07
	30 明るい	4.48	<	4.53	-0.05
	31 率直な	3.81	>	3.76	0.05
	32 健康な	4.43	<	4.47	-0.04
	33 心の広い	4.56	<	4.59	-0.03
	34 意志の強い	4.37	>	4.34	0.03
	35 優しい	4.62	<	4.64	-0.02
	36 頭の良い	3.49	<	3.50	-0.01

*p<0.05 **p<0.01

い」の16項目が認められた。

次にこれら「男性性項目」、「女性性項目」、「有意差無し項目」にカテゴリー化されたものを、先行研究における分析結果と比較することを通して、各性役割意識の認知にどのような変化が見られるかを確認していく。比較分析にあたっては項目の採用にあたって取り上げた柏木(1974)、伊藤(1978)、土肥(1988)、東(1990)らの研究結果を用い、表に示した(表2参照)。

表2 所属カテゴリーについての先行研究との比較

	項目	本研究 (2005)	東 (1990)	土肥 (1988)	伊藤 (1978)	柏木 (1974)
1	たくましい	M		M	M	
2	頼りがいのある	M			M	
3	決断力のある	M			M	
4	行動力のある	M		M	M	
5	忍耐強い	M			H	*
6	大胆な	M			M	
7	積極的な	M	M	M		M
8	誠実な	M			H	
9	信念を持った	M	M	M	M	
10	言葉のていねいな	F		F	F	
11	かわいい	F			F	F
12	繊細な	F			F	
13	色気のある	F			F	
14	優雅な	F			F	
15	分析的な	F	M			
16	愛嬌のある	F			F	
17	おしゃれな	F			F	
18	静かな	F			F	
19	子ども好き	F	F			
20	視野の広い	F			H	M
21	献身的な	*		F	F	
22	冒険心に富んだ	*			M	
23	指導力のある	*			M	M
24	政治に関心のある	*				M
25	自分の生き方のある	*			H	
26	自己主張のできる	*	M	M	M	
27	従順な	*	F		F	F
28	学歴のある	*				M
29	暖かい	*	F	F	H	
30	明るい	*	F		H	
31	率直な	*			H	
32	健康な	*			H	
33	心の広い	*			H	
34	意志の強い	*			M	M
35	優しい	*	F	F		
36	頭の良い	*			H	M

M：男性性項目 F：女性性項目 H：人間性項目（伊藤 1978） *：有意差無し項目

表では、1970年代から90年代に行われた上記の先行研究において、各項目がいずれのカテゴリーに所属していたかを示し、「男性性項目」としていたものを「M」、「女性性項目」としていたものを「F」に、「有意差無し項目」としていたものを「*」とした。伊藤の研究においては先に記したように、「人間性項目」の分類もあることから、これらについては「H」とし、以上アルファベット及び記号によって示している。

先行研究は、男性性や女性性について個別に独立したものと捉え、その組み合わせに

よってアンドロジニーを含む、男性性や女性性の高低による分類を行った調査ではあるものの、両性に対して調査が行われたこともあり、本稿との比較は参考程度のものにはなるが、同世代に行われている調査でもあり、現代の若者における性役割意識の変化の傾向と読み取ることは可能である。本調査の結果と先行研究のいずれかにおいて異なった傾向を示している設問項目を取り上げていくと、「男性性項目」として分類されたものの中では、「忍耐強い」、「誠実な」の2設問項目、「女性性項目」として分類されたものの中では、「分析的な」、「視野の広い」の2設問項目、「有為差なし項目」として分類されたものの中では、「献身的な」、「冒険心に富んだ」、「指導力のある」、「政治に関心のある」、「自己主張のできる」、「従順な」、「学歴のある」、「暖かい」、「明るい」、「意志の強い」、「優しい」、「頭のよい」の12項目が認められた。

はじめに本調査で「男性性項目」に属しているものについて概観していくことにする。先行研究と比べ変化しているものについてみると「忍耐強い」については、本調査結果では「男性性項目」に属しており、男性として望ましい性役割として認知されているものの、1974年に行われた柏木の研究では「有意差無し項目」に属し、1978年の伊藤の報告では、男女に望ましい特性としての「人間性項目」に属していた。次に「誠実な」についても本調査結果では「男性性項目」に属しており、男性に望ましい性役割として認知されているという結果を得たが、伊藤の研究においては「人間性項目」に属していた。

他方「男性性項目」として変化していないものの中で、先行研究からもその支持の多いものを降順でおっていくと、「積極的な」、「信念を持った」、「たくましい」、「行動力のある」、「頼りがいのある」、「大胆な」という結果となった。

続いて本調査において「女性性項目」に属しているものを概観していくことにする。はじめに先行研究と比較し変化しているものについてみると、「分析的な」については、本調査結果では「女性性項目」に属しており、女性として望ましい性役割として認知されているものの、東の報告では、男性に望ましい特性としての「男性性項目」に属していた。次に「視野の広い」については本調査結果、及び伊藤、柏木の結果と全く違う結果となっている。本調査結果では「女性性項目」に属しているが、伊藤の調査結果では、男女に望ましい特性としての「人間性項目」に、柏木の調査結果では男性に望ましい特性としての「男性性項目」に属していた。

他方「女性性項目」として変化していないものの中で、先行研究からもその支持の多いものを降順でおっていくと、「言葉のていねいな」、「かわいい」、「繊細な」、「色気のある」、「優雅な」、「愛嬌のある」、「おしゃれな」、「静かな」、「子ども好き」という結果となった。

最後に本調査で「有意差無し項目」に属しているものについて概観していくことにする。「有意差無し項目」に属しているものの多くが、比較検討を行った先行調査とは異なった結果になっていることが分かる。本調査で「有意差無し項目」に属しているが、先行調査において「男性性項目」になっていたものは、「自己主張のできる」、「指導力のある」、「意志の強い」、「冒険心に富んだ」、「政治に関心のある」、「学歴のある」、「頭のよい」という

設問項目である。

「自己主張のできる」については柏木を除くすべての研究では男性性となっていたが、本研究では「男性性項目」から外れることとなった。また「指導力のある」、「意志の強い」についても、伊藤及び柏木の調査においては「男性性項目」に属していたにもかかわらず、本調査ではその枠から外れることになった。「冒険心に富んだ」については、伊藤の研究と異なった結果が得られ、「政治に関心のある」、「学歴のある」、「頭のよい」という3設問項目については、柏木の研究結果とは異なった結果が得られた。

同様に本調査で「有意差無し項目」に属しているが、先行調査において「女性性項目」になっていたものは、「従順な」、「献身的な」、「暖かい」、「優しい」、「明るい」という設問項目であった。「従順な」については土肥を除くすべての調査結果では「女性性項目」に属していたが、本調査ではその「女性性項目」から外れている。続いて「暖かい」、「優しい」については、最も近年に行われた東、土肥の2調査結果と異なった結果となっていた。最後に「明るい」については東と異なった結果になっている。

4. 結果

以上のように、「積極的な」、「信念を持った」、「たくましい」、「行動力のある」、「頼りがいのある」、「大胆な」という結果は、本調査及び比較検討を行った先行研究においても「男性性項目」として支持されており、大きな変化が見られないことから、約30年間一定した男性に対するジェンダーとしての価値基準であることが分かる。この形容詞群からも分かるように、依然として「性格」、「態度」、「行動」の側面において強い男性像を示していることが見えてくる。

同様に「言葉のていねいな」、「かわいい」、「繊細な」、「色気のある」、「優雅な」、「愛嬌のある」、「おしゃれな」、「静かな」、「子ども好き」という結果は、本調査及び先行研究においても「女性性項目」として支持され、変化が見られないことから、同じく一定した女性に対するジェンダーとしての価値基準であることが見えてくる。この形容詞群からも分かるように、男性性と対極に位置する「性格」、「態度」、「行動」の側面を中心とした女性像を示していることが理解できる。

ただし注目すべき点は、先行調査とは異なった項目である。本調査で「有意差無し項目」に属しているが、先行調査において「男性性項目」になっていた、「自己主張のできる」、「指導力のある」、「意志の強い」、「冒険心に富んだ」、「政治に関心のある」、「学歴のある」、「頭のよい」という項目である。このように「男性性項目」から「有意差無し項目」に変化していることから一部では「性格」、「態度」、「行動」における側面が両性化してきていること、そして「知性」に関する事柄については、男女間に差が見られなくなっていることが分かる。文部科学省の2004（平成16）年の学校基本調査において、女子の高等学校への進学率は97.8%、男子の高等学校への進学率は97.2%と男子を上回った結果となっている。また女子の大学への進学率は短期大学への進学率と併せて48.7%、男子の大学への進学率は短期大学への進学率と併せて51.1%となっている。このように社会的

背景として男女間の進学率の均衡が、性役割意識に影響している可能性があり、「知性」の側面が過去のように男性に求められなくなりつつあることが予測される。また本調査で「有意差無し項目」に属しているが、先行調査において「女性性項目」になっていた、「従順な」、「献身的な」、「暖かい」、「優しい」、「明るい」という項目についても、女性のジェンダーとしての価値基準から外れてきているというよりは、男性にも望まれるようになった性向であるといえる。例えば過去「優しい」という項目は、女性に対して求められた評価基準であったが、表1の数値からも理解できるように、男性では4.62、女性では4.64と、36設問中男女ともに最も支持された項目であり、近年男性の評価基準として採用され始めたことが見えてくる。

以上のように大きく変化している部分もあれば、変化していない部分もあるが、少しずつその差異が均衡化している部分も見いだすことができる。今後はジェンダー棲み分け構造が固定化するというよりは、揺らぎ続けながらも一方の性に求められる特性から、両性に求められる特性の方向に進む可能性が高いことが予測できる。

最後に今後の課題として、上記にも述べたとおり今回の調査は、女性の大学生のみに行っていることから、女性の抱く価値基準の傾向はある一定のところで説明できるものの、男性大学生の価値観との関係性は全く言及できていない点があげられる。さらにジェンダーの規範を明確化していく上で男性の大学生との比較や、性別カテゴリーを中心とした時系列的な比較を行う必要があること、そして他の年齢層や他の地域の大学生についても調査を実施する必要があると考えられる。

引用文献

- 東清和（1990）“心理的両性具有Ⅰ—BSRIによる心理的両性具有の測定”『早稲田大学教育学部学術研究（教育・社会教育・教育心理・体育学編）』39, 25-36.
- 東清和（1991）“心理的両性具有Ⅱ—BSRI日本語版の検討”『早稲田大学教育学部学術研究（教育・社会教育・教育心理・体育学編）』40, 61-71.
- 東清和・鈴木淳子（1991）“性別役割態度研究の展望”『心理学研究』62, 270-276.
- Badinter, Elisabeth（1992）*De L'identite Masculine*: Editions Odile Jacob.(=1997, 上村くにこ・饗庭千代子訳『XY—男とは何か』筑摩書房.)
- Bem, S. L.（1974）“The measurement of psychological androgyny,” *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 42, 155-162.
- Gilmore, David D.,（1990）*Manhood in the Making-Cultural Concepts of Masculinity*: Yale University. (=1994, 前田俊子訳『「男らしさ」の人類学』春秋社.)
- 内閣府（2005）『男女共同参画白書 平成17年版』国立印刷局, 63-66.
- 内閣府政策統括官編（2004）『世界の青年との比較からみた日本の青年—第7回世界青年意識調査報告書』国立印刷局, 78-82.
- 日本MMPI研究会（1969）『日本版MMPIハンドブック』三共房。
- 土肥伊都子（1988）“男女両性具有に関する研究—アンドロジニー・スケールと性別化得点—”『関西学院大学社会学部紀要』57, 89-97.
- 土肥伊都子（1994）“ジェンダーに関する2種のスキーマモデルの比較検討”『心理学研究』65: 84-93.
- 土肥伊都子（1995）“ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ—母性・父性

- との因果分析を加えて一『社会心理学研究』11(2):187-194.
- 伊藤裕子(1978)“性役割に関する研究”『教育心理学研究』26, 1, 1-11.
- 柏木恵子(1967)“青年期における性役割認知”『教育心理学研究』15, 4, 193-202.
- 柏木恵子(1974)“青年期における性役割認知Ⅲ”『教育心理学研究』22, 4, 205-215.
- 関根薫(2002)“社会状況の変化と性役割認知—アンドロジニー・スケールによる比較分析を中心に—”『皇學館大学社会福祉学部紀要』5, 79-90.
- 関根薫(2003)“福祉・看護系学生の性役割認知に関する一考察”『皇學館大学社会福祉学部紀要』6, 83-92.
- 拙稿(2003)“性役割意識と行為における変化”『吉備国際大学大学院博士論文』, 200-208.
- 拙稿(2004)“看護学生における性役割意識の一考察”『吉備国際大学大学院社会学研究科論叢』6, 59-69.
- Terman, L. M. and Miles, C. C. (1936) *Sex and Personality Studies in Masculinity and Feminity*: New York McGraw Hill.
- 安川一(1989)“感性リアリティとジェンダー”『ジェンダーの社会学』新曜社.